



## 21世紀のグローバル社会に必要な豊かに学びあう力を育む

期 間：平成26年4月～  
場 所：神奈川県横浜市立白幡小学校  
対 象：全校児童(676名)

### ねらい

- ①子どもが自ら設定した目標に向けて主体的に判断し、自ら考え、学ぶための授業力の向上
- ②アクティブ・ラーニングの能力育成やカリキュラムの開発
- ③外国語活動、ICTの活用の視点を加えた言語環境の整備の3点を軸に、21世紀のグローバル社会に必要な豊かに学び合う力を育む。

# 思考力・判断力・表現力の育成を目指す アクティブ・ラーニングの能力育成と カリキュラム開発

## 子どもたちが将来求められる力を育成

今の子どもたちが社会で活躍する頃には、社会は劇的な変化を遂げていることが予想される。そんな未来に求められるのは、自ら課題を見つけ、他者と協働し、新たな価値創造に挑む力だ。神奈川県横浜市立白幡小学校(以下、同校)は、こうした次世代の社会の姿にいち早く着目し、子どもたちが将来必要な力を身につけるための教育を実践している。「国籍も言語も異なる人たちが集まるグローバル社会の中で、世界の難しい課題を解決していかなければいけない。そんな時に『じゃあ、私が先頭に立ってやろう』という子どもを育成したい」と永池啓子校長が語る同校の目指す子どもの姿は具体的で明確だ。

始まりは平成20年度。カリキュラムを整えることから着手した。「学校全体がカリキュラム」を合言葉に、掲示物やファイルを活用して学んだことを可視化し、環境を整備。以来、子どもが自ら課題を解決し、自主的な学習ができるよう毎年カリキュラム変革を続けた。こうした取り組みは、近年注目を集めるアクティブ・ラーニング<sup>※1</sup>の考え方と



子どもたちが作った物語りの面白さを発表する1年生

一致している。8年目を迎えた平成27年度は、「21世紀のグローバル社会に必要な豊かに学びあう力を育む『アクティブ・ラーニング能力の育成』」をテーマに特色ある活動を進めた。

※1 アクティブ・ラーニングとは、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」のことで、その過程では「何を教えるか」だけでなく「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視する。

## 取り組みの原点は「どの子にも学力を」

同校の取り組みは「教育者中心の学び」から「子どもが主体の学び」とする変革への挑戦でもあった。その根底には「どの子にも学力を」という強い思いがある。「公立の学校には、経済面で困難な状況にある子どもも通っている。そんな子らにも将来に活かせる学力を身につけさせたい。その思いが、子ども自身が主体的に学ぶことができる質の高い授業へと導いた」と永池校長。



チームで話し合っ勝利するための作戦を練る



グループで協働しながら理科の実験に取り組む

平成23年度に取り組んだ「白幡スタイル」は、まさに「どの子にも学力を」がテーマだ。それまで改革を重ねてきたカリキュラムを再構築し、6年間を通し身につくようカリキュラムを整えた。まずは1単位時間の学習内容を明確にし、その上で言語活動、学習活動を子どもたちが自主的にできるように「きりとる、くみとる、やりとりをする、ふりかえる」という4段階の学習プロセスを設定した。それは、教師が一方向的に進める教育ではない。子どもが主役の教育だ。一人ひとりの学びの定着度を確認する「踊り場」を大切に、どの子にも知識の定着が図れるようにしている。その中では、「わからないので、ここから進めてください」と堂々と言える子を育てることも狙いの一つになっている。それが、「幸せに生きていく大人を作る」ことにつながると考えているからだ。

## 「児童司会」が自主性を育む

同校では「子どもが主体の学び」を促すために「児童司会」を1～6年生の全学年・全教科で実施している。司



児童司会による授業風景。この授業では、板書の担当者が「きりとる、くみとる、やりとりをする」の学習プロセスに沿った授業の流れを黒板に書き、司会者がそれにしたがって授業を進めていた

会は、低学年の場合は日直が担当し、高学年になると学習班(教科班)が担当する。全員が当番制で司会をやる。板書も子どもたちで行い、教師は司会が「では、〇〇先生お願いします」と指名するまで発言しない。1年生でも司会ができるのは、教師が各学年に応じた「型」を用意しているからだ。「型」をもとに、教師は低・中・高学年別に目標を設定し、その実現に向けた個別指導を行っている。低学年は時間の目安を持って進行を行う程度だが、中学年になると「意見

が偏っていますが、別の意見はありますか」と判断力が身についてくる。さらに高学年になると様々な意見が飛び交う討論をまとめ、相違点や共通点に着目している色々な意見を引き出せるようになる。さらに高学年になると様々な意見が飛び交う討論をまとめ、授業のねらいを明確にして進行する力が備わってくるという。

永池校長は、「司会は言語活動を豊かにし、意見をまとめる力がつが、それだけではない。『聞いたことは忘れる、やったことはわかる』という老子の教えがあるように、子どもたちが主体的に学習に関わることで学びが身につくようになる。教育はまさにインディペンデント(自主性)が大事。子どもたちが自分で学び、自分たちで解決する。それに尽きる」と児童司会の意義を語っている。子どもたちは司会をすることに充実感を感じているようで「日直(司会)の日に休むなんて考えられない」と言う声がほとんどだ。

## 自主的学習力の成果

平成27年度、全国学力・学習状況調査の結果、同校は国語・算数・理科で全国平均を大きく上回った。また、「グループワークなどを通して、助け合う、支え合うことを日常的に行なっているため、人とのつながりを大切にする心豊かな子どもが育っている」と永池校長が語るように、「人の気持ちがわかる人間になりたい」と考える子どもが多くなってきたという。その根底にあるのは、自分は誰かの役に立っている、という前向きな気持ちだ。永池校長は「自分にいいところがあると思っている子は、何事も責任をもって諦めずに挑戦できる。これからの人生、どんな困難があっても乗り越えていけるだろう」と取り組みの成果を実感している。



平成27年秋、同校ではこれまで積み上げてきた研究の成果と、その背景にある取り組みを発信する「研究発表会」を開催した。「白幡のやっていることが、新しい教育のヒントになれば」と永池校長が語るように、同校の取り組みを公開することにより、教育の進化に役立てていくことを今後の目標の一つと捉えている



神奈川県横浜市立白幡小学校  
永池 啓子 校長